

聖書箇所 創世記39章1節～6節

- 1 : ヨセフがエジプトにつれていかれたとき、パロの廷臣で侍従長のポティファルというひとりのエジプト人が、ヨセフをそこに連れて下って来たイシュマエル人の手からヨセフを買い取った。
- 2 : 主がヨセフとともにおられたので、彼は幸運な人となり、そのエジプト人の主人の家にいた。
- 3 : 彼の主人は、主が彼とともにおられ、主が彼のすることすべてを成功させて下さるのを見た。
- 4 : それでヨセフは主人にことのほか愛され、主人は彼を側近の者とし、その家を管理させ、彼の全財産をヨセフの手にゆだねた。
- 5 : 主人は彼に、その家と全財産を管理させた時から、主はヨセフのゆえに、このエジプト人の家を、祝福された。それで主の祝福が、家や野にある、全財産の上にあった。
- 6 : 彼はヨセフの手に全財産をゆだね、自分の食べるもの以外には、何も気を使わなかった。

メッセージ骨子 :

<序論> 37年前に観た「マンディンゴ」をいう映画には南北戦争前のアメリカの奴隷制度が描かれていました。それは、白人が奴隷を怒りや不満のはけ口にし、奴隷たちはそれに耐えるしかない世界でした。この物語には「主がヨセフとともにおられたので」(39:2)と何度も出て来ます。この「主がともにいる」と言う事実は、奴隷という立場にまで落ちてしまったヨセフにとって、どんな意味があったのでしょうか。

<ポイント1> 『最後の勝利を信じて忍耐する力が与えられる』

ヨセフが『共に居られる主』を経験させて頂けたのは、父からもらった上着を脱がされ奴隷商人に売り飛ばされた時、つまりこれまで受けてきた父親の庇護を取っ払われ、プライドもアイデンティティも失った時でした。しかし主の摂理は、その13年後の劇的な名誉回復と、総理大臣への抜擢、そしてイスラエル民族の飢餓からの救済にありました。主は砕かれた心を持つものとともにおられ、慰め、寄り添い、今の現実からは及びもつかない最後の大勝利を約束してくださいませ。

「私たちの大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではありません。罪は犯されませんでした、すべての点で、私たちと同じように、試みに会われたのです。」(ヘブル4:15)

<ポイント2> 『出て行く力を与えられる』

アブラハムは父親の死後、神からの「出て行きなさい。そうすればあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福する」という声を聴き、行先も分からずに出て行きました。これが信仰の父と言われるゆえんであり、ユダヤ民族の始まりとさえ言われています。(創世記12:1-4)

一方、モーセはシナイ山で神と出会い、出エジプトの大事業を託されます。その時の約束は「私はあなたと共に行く。私があなたを遣わすのだ」というみ言葉でした。(出エジプト3:12)

主の派遣、主の同行、主の祝福を信じる時、私たちも今いる場所を離れて、次の新たなる世界、未知なる世界に出て行く力と勇気を与えて頂けるのです。

<ポイント3> 『キリストを着せていただける』

ヨセフは上着を脱がされ売られていきましたが、その代わりに、主が彼とともにいてくださいました。またヨセフの存在ゆえに、ポティファルの家と、全財産を主の祝福が覆いました。私たちは自分の『上着』にこだわるあまり、それが自分を覆い隠し、主の働きを邪魔する結果となってしまうのでしょうか？ 私たちが今着てしまっている上着・よろいは何でしょう？プライドでしょうか？

イエス様は、服も下着も脱がされて十字架に掛けられました。プライドもゼロにされ、その極限を通られましたが、そのイエス様を、私たちは着させて頂けるのです。天国はおおいの無い世界。私たちは誰ひとりそんな‘素っ裸’に耐えられるような「心」をもちあわせていませんが、私たちの欠陥(罪)をすべて覆い隠し、天国にふさわしくドレスアップして下さるのがイエス様の上着なのです。

<まとめ> 私たちの人生には試練があります。しかしこの、理由のわからない災難、光の見えない暗闇とおもえる状況こそが「ともにおられる主」を知る素晴らしいチャンスなのです。主がともにおられるとき、私たちは忍耐し、立ち上がり、歩み出すことができます。最後の勝利を約束して下さるイエス様を着て、この人生、最後まで歩み通したいものです。

「神を愛する人々、すなわち、神の御計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益をして下さることを、私たちは知っています。」(ローマ8:28) 以上